

2023年7-9月

20230702

あまり事情に通じておらず、問題の所在自体が十分よく理解できていないのだが、どうやら性的マイノリティー一般に関する問題とは別個に、「トランス論争」ともいうべきものがあるようだ。性的マイノリティー一般（通常、「LGBTQ+」と称される）についてであれば、マイノリティーの権利尊重の立場に立つのがリベラル派で、それに反対するのは保守あるいはむしろ反動派だというのが常識であり、対立構図は明白であるように見える。しかし、「トランス」に関してはやや異なった事情があるようだ。どこまで当たっているかわからないが、一つの思いつきをあえて記してみると（あくまでも「一つの思いつき」なので、将来訂正したり撤回したりするかもしれない）、いわば「本物のトランス」と「トランスと称する偽トランス」がいる場合、前者と後者を外観上見分けるのが難しいという事情が事態を複雑化しているのではないだろうか。「本物のトランス」の権利を尊重するのはよいとして、「偽トランス」が「自分はトランスなのだから」と称して、異性（おおむね女性）の領域に闖入しようとするとき、それをどうやって排除するかというと、必ずしも簡単とは限らない。そして、そのような闖入を恐れる人（女性）は、政治的立場にかかわらずかなりの広がりを持っている。

政治との関わりでいうと、いわゆる LGBT 理解増進法制定過程において奇妙なねじれ現象が見られたということ、武蔵大学の千田有紀氏（ジェンダー社会学）が指摘している。それによれば、自民党はもととあまり乗り気でない法案を「外圧」でとりまとめざるをえなくなり、その過程で迷走した結果、異なる支持層からの反撥をあちこちから受けて、貧乏くじを引いた。他方、それまでこの問題にあまり関心を払っていなかった維新と国民民主党は、たまたま「偽トランス」の闖入を恐れる女性層の支持を得ることに成功して、漁夫の利を得た。そして、マイノリティー差別反対に熱心な立憲民主党と共産党はトランス問題の特殊性を理解することができずに、混乱しているということらしい（私は千田氏の所説を十分咀嚼することができておらず、ここでのまとめ方はかなり我流のもの）。

もう一つ付け加えるなら、あまり注目されていないが、「生粋のラディカル左翼」と目される勢力の一部に「反トランス主義」ともいうべき潮流があり、「リベラル・左翼連合」に亀裂をもたらしているようだ。こうしてみると、性的マイノリティー一般をめぐる議論であれば単純であるかに見えた構図が、トランス問題が加わることでかなりねじれた構図が生じたということのように思われる。このねじれをどうほぐしたらよいのだろうか。

20230705

発行からやや時間が経ってしまったが、『思想』2023年7月号（特集：E・H・カーと『歴史とは何か』）をようやく読みあげた。近藤和彦、加藤陽子、小山哲、成田龍一、吉沢誠一郎、池田嘉郎、三牧聖子、小田中直樹、勝田俊輔、上村忠男、中澤達哉といった錚々たる執筆陣が多彩な議論を展開しており、どれもそれぞれに示唆的なものを含んでいる。も

っとも、論者が取り組んでいるテーマが論文ごとに異なるだけでなく、ある人はカーの仕事の現代的意義を再確認しようとするのに対し、ある人はカー批判を表に出していたり、ある人は新訳の訳者である近藤和彦を顕彰するのに対して、ある人はむしろ近藤批判に力点をおく、さらにある人はカーとも近藤とも別の知識人を主要対象とする、といった感じで、全体として焦点を結びにくいような印象を受けた。実は、私も編集部から執筆の誘いを受けていたのだが、ウクライナ問題への取り組みに朝から晩まですべての時間を費やさなくてはならない状況だったため、後ろ髪を引かれる思いで辞退することにした。その状況はいまでも変わらず、まとまった議論を展開することはできないが、若干の感想を記しておきたい。

「3人のカー」（ソ連史研究者、国際政治学者、歴史哲学者）という言い方（山中仁美）があるが、それ以外に、19世紀ロシア思想史研究者としてのカー、イギリス史学史の中のカーという側面もあり、あわせて「5人のカー」をどう捉えるかという問題が立てられる。私自身は、それらのうち、『歴史とは何か』については『《20世紀史》を考える』（勁草書房、2004年）の第11章と12章、国際政治学者としてのカーについては『民族浄化・人道的介入・新しい冷戦——冷戦後の国際政治』（有志舎、2011年）の第9章、ソ連史研究者としてのカーについては『歴史のなかのロシア革命とソ連』（有志舎、2020年）の第8章（初出は『社会科学研究』第67巻第1号、2016年）で論じてきたが、19世紀ロシア思想史研究者としての面とイギリス史学史の中でのカーについては十分な知識がなく、手つかずにとどまっている（後者の側面については、近藤和彦の新訳に付された一連の資料およびそれに続いて岩波書店の『図書』誌上に連載されているエッセイで詳しく物語られており、教えられるところが多いが、それがソ連史研究や国際政治学にどのように跳ね返るのかはまだ何とも言えない）。これまでの私のカー論にそれなりの独自性があるとしたら、密接な僚友だったドイツチャーとカーの間の微妙な差異に着目し、カーをドイツチャー寄りに解釈する溪内謙説を批判したこと、イギリスのエスタブリッシュメントの一員であると同時に反逆者的な精神を持ち、「上から」の見方に偏する傾向を持ちながら、それに安住もしないという二面性に注目したこと、冷戦期に文字通りの意味で「親ソ」ではないにもかかわらずあたかも「親ソ」であるかに見える際どい綱渡りをしていたカーの態度は、今日の条件で現代ロシアについて論じる上での困難性とも相通じるところがあると指摘した点などにあるだろう。今回の特集の諸論文は、あちこちで私の議論と接する面を持ちつつ、正面からの議論にはならず、いわば各所でニヤミスを重ねている観がある。そうした問題についていつかきちんと論じる機会があればいいのだが。

20230709

昨日、ソビエト史研究会大会が専修大学向ヶ丘遊園サテライトで開かれた。午前の一つ、午後二つで、あわせて3つのセッション。

午前中は若手報告として、冬木里佳「第2次世界大戦期ソ連の戦争障害者支援——「祖国の守り手についての配慮」と当局の問題意識」と当局の問題意識」という報告があった。近年の世界的な福祉国家研究の潮流として「福祉の複合体」史という観点があることを念頭におき、ソ連の社会政策史についても「福祉の複合体」史の文脈で捉えられるのではないかと、そのことによ

って旧西側諸国との比較の道も開かれるのではないかという問題意識に立った報告。ソ連史を孤立した研究対象とするのではなく、世界的な福祉国家研究の一環として取り組もうという問題意識は貴重であり、また多数の資料および先行研究を読みこなして自分の研究に生かそうとする姿勢も心強く感じた。時代的対象として、「第2次世界大戦期」というタイトルにもかかわらず、戦時期と戦後初期の双方を扱い、どちらかといえば後者の方に力点がおかれているのは、やや整理不足の観があった。戦時期には健常者男子の多くが前線に動員され、その後を埋める労働力として女性および労働能力を持つ障害者が重要視されたのに対し、戦後復員に伴って、彼らを抱え込んでおくことは工場経営者にとって「厄介者」視されるようになったという変化があったはずであり、その点をもう少しはっきりさせる必要があるだろう。「障害者」一般と「戦争障害者」をどのような連関で捉えるのかとか、賃金未払問題や年金指定における混乱といった問題は障害者固有の問題というよりも当時の全般的社会情勢の反映ではないかという点も気になった。小さな個別的疑問として、私の感覚的記憶では、1980-90年代にもまだ戦争障害者を街角で見かけることが稀でなかったが、彼らは松葉杖をついて歩くのが普通で、車椅子に乗っているのを見た覚えがない。ソ連における車椅子はいつ頃から普及したのだろうか。別の話になるが、「大祖国戦争のヴェテラン」への敬意の念は、当局の政策だけでなく社会のレベルでかなり普及しており、商店などの行列で彼らを優先する慣行は自発的に守られていたという印象がある。2004年社会保障改革が広汎な反撥を呼び起こし、プーチン政権の支持率低下のきっかけとなったのも、「大祖国戦争のヴェテラン」を含む社会的弱者への社会保障が一種の聖域と見なされていたことを物語るのではないか。勝手な感想を書き連ねたが、こうした感想を誘発するのも、報告の問題喚起力によるものであり、今後の発展を期待したい。午後の第1セッションは、金山浩司編『ソヴィエト科学の裏庭——イデオロギーをめぐる葛藤と共存』。評者は細川瑠璃、中嶋毅の両氏。

第1評者の細川氏は宗教思想史の専門家で、そういう人が研究会に参加してくれたのは嬉しい驚きだった。細川氏の主要研究対象たるフロレンスキー（1882-1937年）は、正教会の司祭であると同時に、モスクワ大学物理数学部で学んだことがあり、電化などに関心を怠っていたという。『ソヴィエト科学の裏庭』の登場人物の一人たる物理学者コーリマン（当時は正統派で、後に異論派に転じた）はフロレンスキーを詳しく読んで、熱心な批判を行なったとのことで、両者の立場は相容れないにしても、実は意外な接点のあることが明らかにされた。ソ連の公的イデオロギーに親和的だった者と非親和的だった者とは、あたかも別の世界に生きていたような印象があり、かつて無視されていた人たちが今日では脚光を浴び、かつて重要視されていた人たちは今日では詳しい検討抜きに単純に忘れ去られる傾向があるが、実は彼らは同時代人として、共通の問題に立ち向かっていたのだという指摘は非常に新鮮かつ重要と感じた。

もう一人の評者たる中嶋氏は、『ソヴィエト科学の裏庭』の主題たる自然科学者の哲学的考察は、かつては多くの人に関心を引いていたが近年は忘れ去られているという状況を踏まえ、今日の状況の中でその歴史的・批判的再検討を行なうことの意味を論じた。「ソヴィエト・マルクス主義」そのものは意味を失ったとしても、それを研究対象として多面的に考察することの意味は失われていないという指摘は多くの出席者の共感を呼んだ。個人的な話題として、1920年代哲学論争の立役者だったデボーリンが政治的に失墜した後も、

歴史研究者として誠実に活動していたという話は特に興味深かった。イデオロギーの外殻に隠されたいくつかの有益なアイデアや「意図せざる効果」とか、リュセンコ現象には歴史的背景の異なるいくつかの要因の絡み合いがあったとか、「党の総路線」の確立の自律的な「露払い」役を演じた人たちの排除と離脱等々、興味深い論点が多く出された。ソヴィエト体制（スターリン体制）の抑圧的性格にもかかわらず、そうした圧力が時に積極的な成果を果たす可能性を秘めていたという指摘は、ソ連史を学ぶ者が共通に意識せざるを得ない論点だが、これをドイツ史における論点——つい最近出た小野寺拓也・田野大輔『検証・ナチスは「良いこと」もしたのか？』（岩波書店、2023年、未見）の問題提起——とどのように交錯させるかは、みなが考えるべき深刻な問題ではないかと感じた。

午後の第2セッションは「ロシア＝ウクライナ戦争とユーラシア諸国」と題されたパネルで、宇山智彦、前田弘毅、立花優、松寄英也、清沢紫織、小森宏美、熊倉潤の各氏がそれぞれ専門とする地域に関する簡にして要を得た報告を行なった。

宇山氏は中央アジア諸国に関して、「ロシア離れ」とかロシアの「勢力圏」とかいった単純化された図式を批判し、地殻変動の中での一見もどかしい「通常運転」という観点を提示した。2014年との違いを指摘した点、カザフスタンにおける世論の変化を紹介した点が特に興味深かった。

前田氏はサカルトヴェロ／グルジア／ジョージアの複雑な内部事情——ウクライナとの関係でも、ロシアとの関係でも、異なる潮流がせめぎあっている——を明快に解説してくれた政権与党は反ネオリベリズムを掲げ、最近ではハンガリーのオルバンやトルコのエルドアンに接近して、「拡大東欧」「拡大中東」路線をとっているという指摘が特に興味深かった。

立花氏はアルメニア・アゼルバイジャン両国の対ロ関係の変化は、直接にウクライナ戦争によって引き起こされたというよりも、長期的な歴史的文脈があるということを考えてべきだとして、特にアルメニアのパシニャン政権登場（2018年）の意味を強調した。

松寄氏は、ヤヌコヴィチの多方向外交はロシアと欧州をトレードオフにとらえず、双方と協力するというもので、その一環として中国との戦略的パートナーシップが打ち出されたが、マイダン革命によってヤヌコヴィチ政権が倒れ、対ロシア関係が一変した後も、中国とのパートナー関係は維持されており、欧州統合と一帯一路は矛盾しないと考えられているという、やや意外な側面を明らかにした。

清沢氏は社会言語学の観点から、ベラルーシ語の書記体系という主題を取り上げ、ある時期には「穏やかなベラルーシ化」「ボトムアップのベラルーシ化」路線がとられ、ルカシェンコさえもベラルーシ語への態度を転換したことを紹介し、都市部でのベラルーシ語使用の拡大が見られること、2020－21年の抗議活動においてロシア語は排除されなかった（チハノウスカヤも元来はロシア語話者）が、その後、ベラルーシ語市民講座やベラルーシ語協会などが解散されるなど、言語問題の政治化が進行していることを紹介した。なお、質疑応答の中で、ベラルーシ語の文章規範はかなり以前に確立しているが、高等教育では今でも大学の授業の大半はロシア語で行なわれていることが紹介された。

小森氏はエストニアにおける対ロシア感情を知る手がかりとして、記念碑移設（主に博物館へ）、地名法改正（本来、地名は地方議会の権限だが、ナルヴァのようなロシア人優勢都市で地方議会がなかなか決めない場合には国家が決めることができるという法律が採択

された)、「赤の象徴」「赤い記念碑」を公的空間から消し去るための法案が2023年2月採択されたが、法案の条文に不明なところがあるという理由で大統領が議会に差し戻して廃案になったこと、美術専門家やソ連の遺産の研究者は撤去反対のようにとらえられがちだが、それらの人々の中でも意見が分かれていることなど、多様な論点を紹介した。かねてより論争の焦点だった言語・国籍問題は「凍結された紛争」という性格を帯びていたが、ウクライナ戦争勃発を契機に「解凍」されていることも指摘された。最後に、政治論争ではソ連時代との断絶が強調されてきたが、社会には存外、ソ連時代の要素が持続しており、ウクライナ戦争勃発後、その消去作業が加速していることに触れ、それは多様性の消去ではないかという深刻な問題が提起された。

熊倉氏は、ロシア・ウクライナ戦争への中国の関わりを論じ、中国がいう「和平交渉への誘導」はそれ自体としての実現可能性は低い、それでもそういうイメージがつけられればそれでよいというのが中国の態度だと指摘した。中国はロシアがウクライナで手を焼いている現状を熟知しているので、それを教訓としており、台湾に乗り出す可能性は低いと指摘したのが印象的だった。

私は先に刊行された和田春樹編『(山川セレクション)ロシア史』下、(山川出版社、2023年)で「周辺諸国」という補章を担当し、多くの若手研究者たちの業績に学びながらユーラシア諸国の現代史を概観した(何人かには原稿を読んでもらった)ことでもあり、今回の研究会での一連の報告はどれも馴染みがあり、なるほどなるほどと思いながら聞いた。私自身はどちらかというと現状そのものよりも直近の過去の歴史に関心があるので、立花報告のうちのパシニャンとテル＝ペトロシヤンの関係とか、清沢報告のうちの初期ルカシェンコと最近のルカシェンコの違いといった点に関心を引かれ、若干の質問を出してみた。それ以外にも多くの参加者がさまざまなコメントや疑問を提出して、活発な議論が展開された。

研究会の後には、コロナ禍開始以来久しぶりの懇親会がもたれ、大勢が参加して議論に花を咲かせることができた。朝から晩まで一日中の討論は疲れもするが、頭の中をリフレッシュすることのできる貴重な機会だった。

## 20230806

先週の木曜から金曜にかけて、信濃木崎夏期大学というところに行って、「ロシアとウクライナの戦争について考える」という話をしてきた。この夏期大学に行くのは、去年に続いて2度目。去年は「現代史を考える」というタイトルで話をしたが、今年は思い切って現下の戦争を取り上げることにした。

講義目次は下の通り(各講は60-65分)。

### 第1講 背景

はじめに

- 1 ウクライナとロシア
- 2 国際的文脈

### 第2講 2014年：危機の始まり

- 3 マイダン革命

4 クリミヤ併合

5 ドンバス戦争の始まり

第3講 局地戦争から本格戦争へ（2014-22/23年）

6 マイダン革命後のウクライナ

7 本格戦争（2022年以降）

第4講 補足および質疑応答。

テーマへの関心が高かったと見えて、参加者数は去年よりも大分多く、約200名が講堂を埋めていた。第4講の時間帯をまるまる補足と質疑応答に充てる方式のおかげで、参加者たちの反応や意見もよく知ることができた。参加者は多様だが、驚いたのは中学2年生の少年がいたこと。最前列で一所懸命聞いていたばかりか、いくつかの質問を提出したが、日頃からよく勉強していることが窺える質問で感心した。最近の日本では知的意欲を持つ人が減っているという話を聞くが、中にはこういう例もあるのだと知って心強く感じた。他の参加者たちからも多数の質問が出され、その内容は多様だが、じっくりと考えながら提出した感じのものがかなり含まれていて、この夏期大学が知的好奇心に富む人たちを引きつけていることのあらわれだろうと感じた。

20230811

遅ればせながら、いま話題の小野寺拓也・田野大輔『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか？』（岩波ブックレット、2023年）を読んだ。

廉価な薄い本とはいえ、発売後すぐに版を重ね（早くも第5刷になったらしい）、ベストセラー・ランキング上位に入っているというのは、本書への関心の高さ——また需要の高さ——を物語る。著者は二人ともドイツ近現代史の代表的な専門家であり、専門研究に裏付けられた手堅い叙述が本書を貫いている。もっとも、こう書いただけでは「御説ごもっとも」で終わってしまいそうだが、それではせっかく一冊の本を読んだ甲斐がない。では何が言えるかという、これはそう簡単ではなく、あれこれと思い悩んでしまう。そんなことを考えていたら、一週間ほど前に、著者のうちの一人である小野寺氏と『世界史とは何か』の著者である小川幸司氏とが相互に相手の著作について論評するという「クロス書評会」があり、そこでは単なるエールの交換ではなく、むしろ「果たし合い」「決闘」に近い真剣勝負がなされたという話を聞いた。私自身はそのクロス書評会の模様を聞くことはできなかったが、その話を聞いて、自分も真剣勝負で臨まねばならないのではないかという気がしてきた。

本書のはじめの方と終わりの方に、「ナチスは良いこともした」と言いたがる人には「ポリティカル・コレクトネス」への反撥があるとか、専門家が非専門家の間違いを指摘すると「マウント行為」と受けとめられやすいといった記述がある。そうしたことを背後の問題意識として本書が書かれているとすると、これは歴史学プロパーの書というよりも、歴史家の啓蒙的発言のあり方を問題にした本ではないかという気がしてくる。「反ポリコレ」的心情というものは、「ポリコレ」が往々にして形式的・権威主義的押しつけと化しがちだという現実に対する反撥として、それなりに理解できる面がないわけではない。だからといって、「ポリコレ」を単純に引っ繰り返せばよいということにはならないが、そうい

う人たちに「君たちの考えは間違っていますよ」と言っても、「これだからインテリはウザいんだ」という反撥を買うだけであり、ますます「反ポリコレ」心情を凝り固まらせるということになりかねない。この状況をどう打開したらよいのか、私にはこれといった定見がないが、とにかくこれは歴史家の啓蒙的発言とか歴史教育について考える際に避けて通ることのできない難問だろう。そう考えると、歴史教育に関する実践と思索を重ねてきた小川氏が本書に「決闘」を挑んだのも、そうした文脈において理解できるのではないかという気がした。

クロス書評会の模様も知らなければ、歴史教育についてこれまで深く考えてきたわけでもない私にこの議論を続ける資格はない。ここではとりあえず、ロシア史・ソ連史に関わる者の立場から本書の問題提起をどう受けとめるかという点について考えてみたい。本書の問題設定に倣っているなら、「スターリンは「良いこと」もしたのか」とか「プーチンも「良いこと」をしてきたのか」といった問いが立てられそうである（専門的見地からするとスターリンとプーチンは大きく異なっていて、同列に並べることはできないが、巷に広がる通俗的イメージとしては、どちらもヒトラーと同じような独裁者と捉えられているだろう）。しかし、その線に沿って議論を進めることができるかという点、到底そうはいかない。それはどうしてかというのが最大の問題である。おそらく、そこには、それらをめぐる言説状況の違いが関係しているのではないだろうか。私はナチズムをめぐる言説状況を詳しく知っているわけではないが、本書の問題提起から察するに、「まともな」議論をしようとする人たちの間ではナチを「絶対悪」とする発想が普及している一方、逆に、だからこそ「反ポリコレ」的心情の持ち主が「ナチスは良いこともした」という言説を、特にインターネット上で相当大量に広めているということのようだ。では、スターリンなりプーチンなりについて、同様のことが言えるだろうか。私はネット上の言説をそれほど幅広く追っているわけではないし、世の中にはいろんな人がいるから、類似の言説がある程度あってもおかしくはないが、それがものすごく広がっているかといえば、そうは思えない。むしろ、スターリンとかプーチンとかあるいはそういう独裁者を生むロシアというのはどうしようもない悪の塊だといった類いの言説の方が優越しているのが現実ではないだろうか。だとすると、その種の言説に対抗するためには、彼らだって「良いこと」——あるいは、あたかも「良いこと」であるかに見える、ある範囲の人々の間でそのように受けとめられること——をやったのではないか、だからこそ彼らはそれなりの大衆の支持をもっている（いた）のではないか、という問題提起をする必要があるように感じられる。

もちろん、そこにおける「良いこと」という言葉には、幾重にも慎重な留保をつける必要がある。本書における議論の立て方に倣っているなら、まず、それらの「良いこと」は特段独自性のあるものではなく、むしろ受け売りの要素がかなりあるのではないかという点がある。また、仮に「良いこと」が標榜されたとしても、それは「善意」によるのではなく、別の政治的目的のための手段だったのではないかという問題もある（もっとも、この点は特定の独裁者に限らず、およそ政治家が何らかの「良き」目標を立てる場合に、そこには「善意」の要素と特定の政治目的のための手段という要素とが混在しているのが普通だろう）。「良き」目標がある程度追求されたとしても、それがどれほどの成果をあげたのかは批判的に検証されなくてはならない。さらに、大衆の支持があったとしても、その支持の内実は多様であり、体制のイデオロギーをそのまま受容していたとは限らないし、

体制の政策に「乗っかる」ことで得られる利益も一定の役割を果たしただろう。ある程度の「支持」を確保し、民意を背景にしていたという意味では「民主的」な側面を持つが、その「民意」が操作されていたり、ねじ曲げられたりしていたということも見失うわけにはいかない。このように多数の留保をつけたカッコ付きの「良いこと」は、決して文字通りの「良いこと」でないのはいうまでもない。それでも、あたかも「良いこと」であるかに見える面があり、それが大衆を捉えた面もあるということがあまり気づかれていないなら、それはそれとして指摘しておかなくてはならない。本書のタイトルを引っ繰り返した感じになるが、「スターリンは／プーチンは、全然「良いこと」をしなかったのか？」という問題提起が必要ということになりそうである。

このような問題提起は一見したところ本書とは逆向きになっているが、今つけた多くの留保は本書の記述をうけたものであり、その意味で、実はそれほど隔たっていないようにも思われる。それでもやはり外観的には逆向きの形をとるとしたら、それは何を意味するのだろうか。

20130816

書き込むのが遅くなってしまったが、立岩真也の急逝の報（7月31日）には愕然とさせられた。もっとも、私は彼の多数の著作のうちのほんの一部しか読んだことがないし、直接の縁もごく細いものでしかない。それでいながら、頭の中に長く続く強い印象を残す人であり、今後も大きな仕事をしていくのだろうという予感をいただいただけに、訃報を知ったときには思わず絶句した。

私をはじめて立岩の仕事に接したのは、彼のデビュー作『私的所有論』（勁草書房、1997年）を読んだときのことである。それまで何の予備知識もなく、ただ勁草書房の担当編集者から「とても面白い本です」という添え書き付きで送られてきたことから、とりあえず読んでみたところ、言い知れぬ知的興奮を覚えた。どのように読んでよいのか分からないままに、手探りで長文の読書ノートを書いてホームページ上に公開した。

立岩の第2作『弱くある自由へ——自己決定・介護・生死の技術』（青土社、2000年）もこれとあわせて読んだ（正確に言えば、より薄くて読みやすそうに見えた第2作を先ず読んで、その勢いで第1作にも手を伸ばした）。大分古い話で、もう時効だと思うので敢えて書くが、私は東大の入試問題作成を仰せつけられたとき、この本の一節を利用したことがある。東大を受験するような人に「弱くある自由」という考え方を知ってもらいたいという思いがあった。余談になるが、上野千鶴子はあるところで、「「弱さを認める強さ」とか、「卑怯者である勇氣」というと、男には届かないんですよ」という発言をしている（『現代思想』2011年12月臨時増刊号に収録された宮地尚子との対談）。上野は立岩のことをよく知っているはずだが、こう発言するとき、立岩が『弱くある自由へ』という本を出していることをまるで思い出さなかったようである。さらに余談を重ねるなら、私はかつて上野に宛てたメールのなかで自分の弱さとか臆病さということに触れたところ、「あなたのように自分の弱さを認める男性は稀有です」という返信があった。強い女性である上野には、弱さについて考える男性という存在をなかなか想像することができないのではないかという気がした。

余談はさておき、これらの本を読んだ段階では、私と立岩の間には直接の接点は皆無であり、面識もなかった。そういう立岩と顔を合わせる機会ができたのは、稲葉振一郎・立岩真也『所有と国家のゆくえ』（NHK ブックス、2006年）という本のブックトーク（ジュンク堂池袋本店、2006年9月16日）に招かれたときのことである。二人の著者とは世代も専門もおよそ隔たっている私がどうしてそういう場に呼ばれたのかはよく分からないが、とにかく興味深い企画だし、二人の著者と顔を合わせてみるのも悪くないだろうと考えて、何をどう議論してよいか頭がまとまらないままに、とにかく出席してみた。このブックトークは、それ自体としては企画の性格上、どちらかというとお行儀のよい意見交換にとどまったが、その後の懇親会では、アルコールが入ったおかげもあって、立岩とかなり突っ込んだ話をするのができて、それまでよりもぐっと親近感が湧いてきた。彼と直接顔を合わせたのはこれが最初で最後である。

彼の作品としては、それ以外にも『自由の平等——簡単に別な姿の世界』（岩波書店、2004年）、『希望について』（青土社、2006年）などを読んだが、次第に何となく遠ざかってしまった。それほど明確な理由があったわけではないが、何冊かの著作を読むうちに、徹底して分かったわけではないにしても、やや飽きてきたというような感覚が生じてしまったような気がする。また、彼の独特な文体はいささか説明不足で、「分かる人だけに分かればよい」というようなところがあり、ついて行くのに困難を覚えるようになった。彼自身の文章の場合は、まだしもその文体自体が独特な個性と魅力をなしているが、彼の監訳で出されたトマス・ポッグ『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか——世界的貧困と人権』（生活書院、2010年）は、おそらく若いたち人の下訳に彼が手を入れたのだろうが、生硬だったり舌足らずだったりする下訳にそれほど徹底して手を入れていないため、まともに読める訳文になっていないような気がした。こういう風に多少批判的になり、その仕事を継続的に追うことはしなくなったが、それでも、どこか気になる存在であることに変わりはない。通常の学問の枠を超えて、ある種の運動と独自の世界をつくりだしているという観があり、「ただ者ではない」という意識はずっと継続していた。まだ62歳という年齢であり、闘病中も最後まで弟子たちにオンラインでの指導を継続していたという報道に肅然たる思いをさせられた。

20230906

いわゆる「処理水」あるいは「汚染水」放出問題をめぐって、私自身は純然たる素人であり、これといった見識を持っているわけではないが、それでも一応は気になり、いろいろな人の言説を見聞きしてきた。それらを整理すると、いくつかの類型に分かれるような気がする。

- ①政府の説明はいうまでもなく科学的に裏づけられた正しいものだ。それに反対する人たちは科学を理解せずに、感情的に反撥しているだけだ。
- ②政府の説明はいうまでもなく科学的に間違っている。それを正しいと言い張る人たちは御用学者でしかない。
- ③政府の説明は、これこれの理由で妥当とみなしうる。その根拠が十分丁寧に説明されていないのは遺憾だし、人々が感情的に反撥するのも無理からぬところがあるが、とにかく

結論的には正しい。

④政府の説明は、これこれの理由で間違った部分を含んでいる。その部分を見捨て「科学的に正しい」と言い張るのは、それこそ非科学的だ。

量的には、このうちの①と②が大多数をなしており、互いに相手を「問題外」と決めつけて、まるで話の通じない対決状況を現出している。これに対し、③と④——量的には比較的少数だが、ときおり目にするのではないわけではない——は、一応は理性的な議論のはずだが、それでも実際には、ほとんどの場合、かみあった論争がなされてはいないように見える。

一つの問題は、論点が単一ではなく、多岐にわたっている（トリチウムとそれ以外の放射性物質を分けた上で、それぞれについての評価、放出後の変化や累積効果の可能性、いつまでに放出を始めなければタンクでの貯蔵が行き詰まるのか、それはいつ頃までに完了するのか、タンク増設の可能性、モルタル固化その他の処理方法の可能性、これまで検査の対象となったとされる3つのタンクとその他のタンクの比較、「国際的に見て許容基準」という場合の国際比較の指標の取り方、IAEAはどのような情報に基づいて、どのような判断を示したのか、その他その他）ため、正否を一義的に確定することが難しいという点にあるのではないだろうか。こういう複合的な問題については、例えばある点では一方の側の議論に分があるが、別の点では他方の議論に分があるといったこともありうる。ことがことだけに、完全に中立な論者の存在を想定するのは無理だろうが、なるべくこうした複合的な論点を多角的に比較対照する議論があってくればよいのだが。

20230911

私は芸能界の事情には疎く、ジャニーズ系タレントたちのことについても、あまりよくは知らない。最近耳目を集めている事柄——実はかなり古い時期にさかのぼる経緯があり、ある範囲ではよく知られていながら、蓋をされていたらしい——については、ひどい話だという以外に言うべき言葉を持たない。ただ、これまで事情をよく知っていたわけでもなければ、被害者救済のために動いていたわけでもない人間が、最近の報道を知ってにわかにな「正義の味方」のような顔をして「水に落ちた犬を叩け」といわんばかりの態度をとる資格があるかといえば、少なくとも私にはないと感じる。

それはともかく、先日の記者会見における東山紀之の発言を見ていて私の頭に思い浮かんだのは、1991年7月のソ連共産党中央委員会総会におけるゴルバチョフの発言である。その総会にゴルバチョフが提出した新党綱領案は共産主義を放棄して社会民主主義路線に乗り換えようとする方向のものであり、党名についても社会民主党とか社会党といった名称への変更可能性を示唆していた。しかし、彼は同時に、旧来の党名に自己の人生を結びつけていた多数の党員たちの心情をも配慮してすぐに結論を出すのではなく、数ヶ月後に予定された臨時党大会で結論を出すようにと呼びかけた（その直後に起きたクーデタ事件により、このシナリオは実現の道を閉ざされた。ソ連共産党解体後のゴルバチョフはロシア社会民主党という党を創設したが、泡沫政党以上の存在となることはできなかった）。

一般論になるが、どのような組織であっても、その中で犯された恥ずべき事柄について、その周辺にいた人たちはある程度事情を知って心を痛めつつも、同じ組織に属する仲間た

ちへの恩義なり連帯感情なりから、あえて告発の道を選ばず、苦しい気持ちで沈黙を守るというのは珍しい話ではない。何らかのきっかけでその問題が公けにされたとき、「お前はあのときどうして黙っていたのだ」と問い詰められて苦しい言い訳をしたくなるというのもよくある話である。これは民間企業、官庁、大学、政党、大衆運動などの別を問わず、およそ組織というものにつきまとう問題ではないだろうか。いまジャニーズなり、ジャニーズと密着していたメディアなりを叩いている人たちのうち、自分はそうしたことと完全に無縁だと言い切れる人がどの位いるのだろうか。